

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32631

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520026

研究課題名(和文) ブランシュヴィックのスピノザ解釈がシモーヌ・ヴェイユの思想成型に与えた影響

研究課題名(英文) An Inquiry into the Possible Influence of Brunschvicg's Spinozist Studies on the Formative Thought of Simone Weil

研究代表者

富原 眞弓 (TOMIHARA, Mayumi)

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：70227635

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題であったヴェイユの思想成型におけるブランシュヴィックの直接的な影響の痕跡を特定するには至らなかったが、ヴェイユが受けた1920年代の哲学教育に通底するブランシュヴィック世代の哲学者たちのスピノザ回帰による哲学刷新の潮流を析出することができた。また、ヴェイユのスピノザ的必然性の概念を、著作の執筆時期別に編纂・翻訳した「シモーヌ・ヴェイユ選集」(全3巻、うち中・後期2巻は本研究期間中に刊行)、および「カイエ」に基づく『重力と恩寵』の徹底的な校訂と翻訳をつうじて総合的かつ仔細に検討し、その成果を翻訳と詳細な訳註に反映させた。

研究成果の概要(英文)：This research project has ascertained a movement to revitalize philosophy through a return to Spinoza evident in the thinking of the philosophers of Brunschvicg's generation. By exploring this movement historically through its various phases, this project has clarified some paths by which Spinoza had been appropriated in French philosophy. Although a direct connection between Weil and Brunschvicg is yet to be proved, it may be stated that Weil had received a formative philosophical education from the hands of these philosophers. Another object of this research project has been the comprehensive and detailed analysis of the concept of necessity in Weil's philosophy through an annotated translation of a selection of works from Weil's early, middle and late periods, and a complete annotated translation of the representative work of her late period, "Gravity and Grace".

研究分野：フランス思想

キーワード：シモーヌ・ヴェイユ レオン・ブランシュヴィック スピノザ研究 フランス思想

1. 研究開始当初の背景

この数十年來、フランス現代思想におけるスピノザ哲学の認知度と重要性は一挙に高まり、昨今では哲学・倫理学・政治学の領域で理論的根拠として頻りに参照されている。第三共和政フランスを代表する哲学者のひとりであったレオン・ブランシュヴィック(1869-1944)はつとにスピノザ哲学の倫理的含意に着目していたが、戦間期ヨーロッパの不穏な政治状況と労働闘争の時勢が災いして、ブルジョワ体制派の御用学者の烙印を押され、彼のスピノザ研究が国内外で理論として注目されるにいたらなかった。この状況はフランスにおけるスピノザ受容史研究に空隙を穿ったのみならず、日本におけるフランス現代思想の分布図にも少なからぬ偏向をもたらした。この空隙もしくは偏向を是正することが本研究の目的の背景にある。

ブランシュヴィックのスピノザ解釈の特徴は、スピノザの倫理思想の解明にあるといえてよい。1891年の道徳・科学アカデミーの受賞論文「スピノザの倫理について」において、機械論的な世界観であるがゆえに倫理がなく、人間の善悪を越えた必然性に従うがゆえに愛がないとされてきた当時のスピノザ解釈を反駁し、機械論的であっても倫理があると考えるスピノザ解釈の可能性を論証してみせたからである。

シモーヌ・ヴェイユ(1909-43)研究においても、ブランシュヴィックにつづじるスピノザ理解が認められた。研究代表者はこれまで長くヴェイユの研究・翻訳にたずさわってきた。なかでも全未邦訳の論稿からなる『シモーヌ・ヴェイユ選集 初期論集—哲学修業』(2012年1月刊行)の翻訳によって、従来、ヴェイユ後期思想の特徴とされていたスピノザ的必然の概念が、すでに十代の初期論考にも顕在的に析出されることを証左した。ヴェイユは人間を自然の必然性に服し、その一部となって生きる存在者とみなし、そこにこそ人倫の真の根拠を認める。この初期論集に掲載された論文の執筆時期は、ヴェイユがブランシュヴィックの講義を受講していた時期とかさなり、ヴェイユがブランシュヴィックのスピノザ解釈の影響をうけた可能性は大いにある。これまでのヴェイユ研究はヴェイユの思想成型における師をアラン(エミール・シャルティエ 1868-1951)に限定し、彼の影響にのみ焦点をあて、ブランシュヴィックを省みることはなかった。アランが政治や社会問題にたいして発言し、行動する哲学者だっただけに、象牙の塔の隠遁者を連想させるブランシュヴィックへの風当たりは強く、ヴェイユも反発した若者のうちのひとりであったからである。

以上の理由から、なお可能性の示唆にとどまるヴェイユとブランシュヴィックのスピノザ解釈のつながりが国内外のブランシュヴィック研究の不備に起因するのではない

かと考え、本研究の着想にいたった。

2. 研究の目的

本研究の着想にいたった学術的背景および従来の研究成果をもとに、ブランシュヴィックのスピノザ解釈の体系的な把握とヴェイユとの関係性の探究を目的とした。

具体的には、ブランシュヴィックの『スピノザと同時代人』の読解と翻訳をすすめ、彼のスピノザ理解を明らかにするとともに、彼のスピノザ理解とブランシュヴィックの前世代および同世代の哲学者たちのスピノザ理解との関連性を把握することをめざした。これらを解明することで、フランスのスピノザ受容史におけるブランシュヴィックのスピノザ解釈の位置が確認できると考えられたからである。

上記2点をもとに、研究代表者の研究対象であるヴェイユのスピノザ解釈の理解を深め、ブランシュヴィックのスピノザ解釈との関連性をさぐる。ヴェイユは同時代の哲学者たちが実存主義、現象学、マルクス主義、精神分析などあらたな学問領域に乗り出すなか、ひとりプラトン、デカルト、スピノザなど伝統的な哲学への信頼を失わなかった。これが本研究において対象をアランにとどめず、アランの師であるラニヨー(1851-94)、さらにその師であるラシュリエ(1832-1918)にまで遡った理由である。三者ともスピノザ研究に熱心に取り組み、ブランシュヴィックへの影響も強かった。ラシュリエ、ラニヨー、ブランシュヴィックらヴェイユの前世代のスピノザ研究にもとづいて、ヴェイユのスピノザ解釈成型過程を明らかにする。これにより、ヴェイユの思想成型のあらたな視座を得ることを目的とした。

また本研究をつうじて、スピノザの倫理思想の現代性が明らかになる可能性がある。ブランシュヴィックは当時のフランスに特徴的な同化ユダヤ人エリートとして、二度の世界大戦を生き抜いた。ユダヤ人ならばだれであれ、そのユダヤ性ゆえに社会的・政治的な試練にさらされざるをえない状況下において、あえて一筋縄ではいかないスピノザに倫理を求めたのはなぜか。伝統的な善悪の概念を越えたスピノザの倫理、それは説明のつかない不幸に、現代人がしばしば経験する安易な解決を許さない困難な状況に対処するとき、われわれが振りしぼる勇気の根拠となりうる。閉塞的と思える状態をうけいれる勇気は、現実からの逃避ではなく怯懦な諦めの徴でもなく、事態を切り拓く能動性であり、真理との正面きっての対峙である。ブランシュヴィックのスピノザ解釈をつうじて、スピノザの倫理思想の現代性がおのずと浮き彫りになると予想される。以上の目的をもって、本研究をおこなった。

3. 研究の方法

大きく三つの区分に研究方法を分けた。

(1) ブランシュヴィックの『スピノザと同時代人』の読解および翻訳作業。

『スピノザと同時代人』の読解および翻訳作業をつうじて、ブランシュヴィックによるスピノザ思想の主要概念の理解を確認するとともに、ブランシュヴィックが使用したスピノザに関する文献をたどり、当時のスピノザ研究の在り方や、スピノザ受容の過程を探ることを目的とした。

(2) ヴェイユ以前のスピノザ受容にかかわる動向調査。

主に英・仏の図書館における文献調査によって動向調査をすすめた。ブランシュヴィックの前世代と同世代の哲学者たちによるスピノザ理解とブランシュヴィックのスピノザ理解との関連性を明らかにすることを目的とした。本研究課題全体のなかの思想史的位置づけをなし、ブランシュヴィックのスピノザ解釈の歴史的な流れを補強するためにおこなった。ここでの具体的な作業の大半は文献収集にあり、文献をいかに収集できるかにかかっていた。そのため、研究年度にかかわらず積極的に資料収集をおこない、研究が円滑に進行するよう努めた。

(3) ヴェイユのスピノザ解釈の成型過程の解明。

ここでは、前述の(1)(2)と研究代表者のこれまでのヴェイユ研究をもとに、ヴェイユのスピノザ解釈の成型過程を明らかにする。(3)を本研究の総括とする。ブランシュヴィックはヴェイユのパリ高等師範学校の指導教官だったが、学問上の相違をめぐる論点は伝えられず、ヴェイユの先駆性や独創性に当惑するブランシュヴィック像だけが強調されてきた。ヴェイユが1930年に提出したパリ高等師範学校の卒業論文「デカルトにおける科学と知覚」の指導教官だったブランシュヴィックは、アランの影響が顕著であった個性的なヴェイユの叙述スタイルを是とせず、合格点ぎりぎりの20点満点中10点をつけた、といった逸話ばかりがヴェイユの評伝にこのんで挿しこまれる。そこで、こうした逸話を排し、純粋に哲学的思考にのみ依拠しながら、前述の(1)と(2)をもとに、ヴェイユのスピノザ理解に影響をおよぼしたと思われる前世代の哲学者たち、ラシュリエ、ラニョー、ブランシュヴィックのスピノザ理解とヴェイユのスピノザ理解を比較・検討し、ヴェイユのスピノザ解釈の成型過程を明らかにする。

4. 研究成果

(1) フランス国立図書館等における文献調査により、ブランシュヴィックが創刊者のひ

とりとして名を連ねる『形而上学・倫理学雑誌』(以下RMM)の理念や手法において、スピノザ回帰がみられることが明らかになった。RMMは社会学、心理学、政治学等、実証科学にもとづく多様な学問領域が開花し、主流となっていく時代に、他分野の学問領域と哲学との交流を図りつつ、哲学の刷新をめざした雑誌である。アラン、ジャン・カヴァイエス(1903-44)、ジョルジュ・カンギレム(1904-95)、レイモン・アロン(1905-83)、ジル・ドゥルーズ(1925-95)など多士済々の執筆陣を擁し、いまなお哲学的議論の中心的役割を担っている。RMM創刊期にスピノザ回帰への明確な潮流を見出せたことで、ヴェイユ前世代の哲学者たちによるスピノザ解釈の糸口を得ることができた。また、RMM内で議論されるフランス国内の哲学・倫理学の教育改革とスピノザ思想の関係性を抽出し、ヴェイユの思想成型期におけるスピノザ研究の状況の一端を解明した。これらの研究成果を、RMMの創刊者たちとスピノザ思想の関係性を論じたヴァンサン・デュクレールの論文「世紀転換期のフランスにおけるスピノザ思想と民主的知識人」の翻訳とこれに附した解題というかたちで雑誌に掲載した。

RMM創刊者たちの多くは宗教的特性をもたないほぼ完璧に同化されたパリのユダヤ系知識人であり、ドレフュス派への参与を民主主義の本質的な一契機とみなし、形而上学と倫理の刷新を自身の使命と考えた。困難な時期には相克する要請を突きつけあう政治と倫理を双方向的に変革しようとする彼らの試みは、『神学政治論』や『国家論』のスピノザが政治と倫理とに担わせた機能を想起させる。『重力と恩寵』のヴェイユもまた、政治と倫理の厳しい要請について、いっそうその厳しさを磨きあげながら、「超越的なもの、超本性的なもの、真に靈的なものの領域に入りこんではじめて、人間は社会的なものを凌駕できる」と書き記した。社会の排他的出来事にたいしてRMM創刊者たちが哲学と倫理の刷新に託した姿勢は彼らのスピノザ回帰にともなって、ヴェイユへと連なりうる可能性を見出すことができた。

(2) ブランシュヴィックの『スピノザと同時代人』の翻訳作業を介して、ブランシュヴィックのスピノザ解釈が知性主義的傾向を強く帯びるとともに、その知性主義が同時に倫理を意味することが明確になった。ブランシュヴィックはスピノザ思想を総じて、スピノザの知性とは陶酔を招く信じやすさに抗う批判的思考であると論じ、批判的思考の涵養こそがいかなる党派・信仰・学説にも馴致することのない自由な思考であると主張した。個々人の思考力を担保することが多様な意見を可能にし、社会で多様な人びとが生きるうえで欠くことのできない要素、すなわち民主的思考であると考えていることが明らかになった。

(3) 前述の(1)と(2)を敷衍するかたちで、ブランシュヴィックの同時代の哲学者たちによるスピノザ解釈が、社会におけるスピノザ思想の実践とひとつである可能性を示した。アラン、ラニョー、ポール・デジャルダン(1859-1940)、エリ・アレヴィ(1870-1937)といったブランシュヴィックの同時代の哲学者たちの多くが、それぞれの仕方で社会に参与したことに着目し、その活動の軌跡と活動を支えていた思想を丁寧にたどった結果、スピノザが人生と哲学とを切り離さなかったのとおなじく、哲学を社会のなかで実際に役立てるべく行動する哲学者たちの姿が認められた。スピノザにもとづく堅固な学説や哲学体系を構成するのではなく、社会のただなかで実践してみせた彼らの根底にはスピノザから汲みとったとみられる脱党派的な批判的思考がみられ、それは同時に、フランス共和政に欠かせない脱宗教的な教育の根拠でもあることを示した。

最終年度には、これらの研究の総括として、更なる文献調査をおこない、その成果を資料集として編纂した。資料集においては、ヴェイユ前世代の哲学者たちによる社会における脱党派的活動をまとめた。二つの世界大戦を経験することになる混迷した時代をまえに、社会をめぐる多様な理論が勃興し、集団を形成するなか、政党、教義、主義、宗教に関わりなく、倫理と一市民としての在り方を抛り所に活動した諸団体、たとえばジョルジュ・デルム(1867-1937)らを中心とした労働者自身による「概念の協同」や民衆大学をとりあげた。とりわけ、民衆大学の創始者デルムが主宰紙に掲げた「われわれが望んでいるのは、人類の大半をその埒外に放置(せず)ひと握りの人間がおのれを利するべく作りあげた文明ではなく、すべてのひとが競いあい、かわりあうべく呼ばれている文明である」と謳う民衆大学創設の決意文は、ヴェイユが遺著『根をもつこと』で訴えた「真の大衆教育」の理念につづる。ヴェイユによれば「今日、大衆教育と称される手順とは、閉じられた環境で生成され、あまりに多くの欠陥があり、しかも真理にまったく意を払わない現代の文化から、まだそこにかろうじて残っていた純金を大衆化の操作によって拭いさったうえで、学びたいと願う哀れな人びとの記憶のなかに、ひからびた残滓を親鳥がひな鳥に口移しで餌を与えるように押しこむこと」にすぎない。この欠陥はルネサンス期に生じた教養人と大衆との分断に端を発する。したがって民衆に必要なものは、「知識人の文化」を「大衆向け」に希釈した模造品ではなく、民衆の感受性と環境に合致した「翻案」でなければならない。

前述の「世紀転換期のフランスにおけるスピノザ思想と民主的知識人」がRMMにたざさわったブランシュヴィック世代の哲学者たちの動きを、広い意味でのスピノザの「民

衆教育」に関連づけたように、この考えをふたたびブランシュヴィック世代を經由したスピノザ主義への回帰とみなすこともできよう。こうした哲学者たちの働きかけを吟味し、若きヴェイユの思想成型に影響を与えた思想的伏流を探りあてることができた。また、本資料集において、デジャルダンやラニョーらによる「真理のための同盟」や、アレヴィやブランシュヴィックら同化ユダヤ人哲学者たちの社会参与とその根拠となりうる科学と倫理の関係性をとりあげ、今後、より包括的かつ発展的に研究を継続する目処がついたと考える。

(4) 『シモーヌ・ヴェイユ選集 後期論集・霊性・文明論』(2013年12月20日刊行、みすず書房)の翻訳をつうじたヴェイユ理解および文献研究により、ヴェイユのスピノザ理解について、困難な時代のなかでますます純化されていくヴェイユの後期思想を軸に集中的に考察できた点にくわえ、この考察が翻訳作業を介してなされたことにより、より精緻な文献研究を可能にした。

ヴェイユのスピノザ解釈については、ヴェイユの後期思想の代表作でもある『重力と恩寵』の校訂および翻訳を介して研究代表者がすすめた。本校訂版では、表題、三九の主題の分類と順序、および各断章の区切や順序は、従来のティボン版『重力と恩寵』に抛りつつも、すべての断章を「カイエ」の当該箇所と照合し、ティボン版との異同を逐一確認した。その結果、少なからぬ数の断章に段落・順序・区切・表記・構成等の移動や変更が認められた。そこで当該の「カイエ」に準じて復活・削除・差換え等の復元をおこない、本文の分量は二割近く増えた。ティボン版は一般読者になじみのない概念や主題を割愛し、古典や哲学関連の引用、ヨーロッパ外の文明や他宗教への言及を省略する傾向がある。主たる省略型は、(一)プラトンやギリシア悲劇を中心とするギリシア古典、(二)エジプト、メソポタミア、インド、中南米の古代神話を含む古今東西の民間伝承、(三)種々のウパニシャッド、『バガヴァッド・ギーター』、道教、禅仏教等の東方の宗教、(四)オック語文明圏の叙事詩、吟遊詩人の抒情詩、カタリ派の異端、(五)デカルト、スピノザ、カント、ヘーゲル等の哲学的言説などで、本研究との関連ではとくに(五)が重要である。また、本文理解に資する493におよぶ詳細な訳註と出典を施し、ヴェイユの全貌を解明するうえで不可欠な哲学者たち(プラトン、デカルト、スピノザ、カント)への言及を明示した。これにより『重力と恩寵』で語られるヴェイユ後期宗教思想のエッセンスをヴェイユの著作全体に置き換えて読解することが可能になった。ヴェイユとブランシュヴィックの直接的な影響関係は認められなかったが、アランの影響もあり、デカルトの意志の哲学が色濃く認められる前期思想が30年代の労働運動・革命思想・

スペイン内戦参加等の挫折と、占領中の強い
られた失職により深い沈潜の時代をへて後
期思想の特徴とされるスピノザの必然の受
容へといたる過程が「カイエ」に認められた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 富原真弓 / 佐藤紀子 訳

ヴァンサン・デュクレール「世紀転換期のフ
ランスにおけるスピノザ思想と民主的知識
人」(in *Archives Juives : Revue d'histoire
des Juifs de France*, 2002, pp. 20-42) 『思想』
3月号(第1091号)、岩波書店、2015年3
月、92 - 116頁、査読有。

(2) 佐藤紀子 「諸科学と哲学の交流地点『形
而上学・倫理学雑誌』」、『宗教と文化』第30
号、聖心女子大学キリスト教文化研究所、
2014年3月、133 - 143頁、査読有。

〔学会発表〕(計3件)

(1) 佐藤紀子 「フッサールのパリ招聘に託
された意義とはなにか」、日本現象学会37回
大会、同志社大学(京都府、京都市)、2015
年11月8日。

(2) Sato, Noriko

Laic Education in the Formative Years of
Weil's Thought and Spinoza as its Source.
American Weil Society, 2015 Colloquy,
April 24 2015, Lesley University
(Massachusetts, USA).

(3) 佐藤紀子 「『形而上学・倫理学雑誌』
における哲学と宗教の教育上の課題とその
手法」、日本カトリック教育学会、第37回大
会、星美学園短期大学(東京都、北区)、2013
年8月31日。

〔図書〕(計3件)

(1) 富原真弓 校訂翻訳

シモーヌ・ヴェイユ 『重力と恩寵』、岩波書
店、2017年3月、全464頁。

(2) 富原真弓 編訳

シモーヌ・ヴェイユ 『シモーヌ・ヴェイユ選
集 後期論集—霊性・文明論』、みすず書房、
2013年12月、全296頁。

(3) 富原真弓 編訳

シモーヌ・ヴェイユ 『シモーヌ・ヴェイユ選
集 中期論集—労働・革命』、みすず書房、
2012年8月、全328頁。

〔記事〕(計1件)

(1) 富原真弓 「ル・ピュイのシモーヌ・
ヴェイユ」、『図書』、762号、岩波書店、2012

年8月1日、14-19頁。

〔その他〕(計1件)

(1) 富原真弓 / 佐藤紀子

科学研究費助成事業基盤研究(C)「ブランシ
ュヴィックのスピノザ解釈がシモーヌ・ヴェ
イユの思想成型に与えた影響」資料集、表紙
共全40頁、2017年3月24日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富原 真弓 (TOMIHARA, Mayumi)

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：70227635

(2) 研究分担者

佐藤 紀子 (SATO, Noriko)

聖心女子大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：20453657